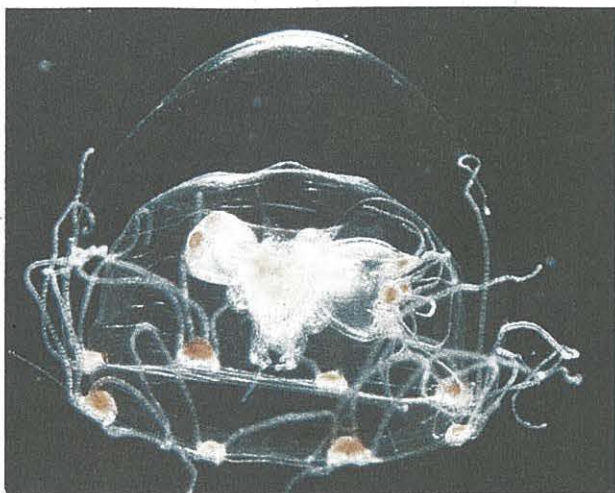


シミコクラゲ



小さなクラゲをつくるシミコクラゲ (下関産、河村真理子博士撮影)

久保田 信

74



シミコクラゲは、傘の直径が数ミリの小型ヒドロクラゲである。画像の個体はまだ成熟していない。この時期には胃

胃袋を支えるゼラチン質の短い柄があるが、胃袋は傘の下に開いた海水の出入り口から突き出さない。胃袋の下にある口唇の四隅が伸びるのもこのクラゲの特徴である。

口唇の先端

袋の表面にいくつものクラゲ個体を一度に出芽して、自分のコピー(クローン)を次々とつくる。画像には今にも遊離しそうなクラゲ芽もできている。そのため急速に個体数を増やすことができ、ある時期に莫大(ばくだい)な数になることがある。

と両脇に刺胞の塊があって、一見すると触手のように見えるが、そうではない。生殖巣は胃袋の上部の表面を取り囲んで発達する。

胃袋で消化した栄養を体全体に巡らせる放射管は4本あり、傘の縁周りを1周する環状管につながっている。傘の縁の8カ所で触手が束状となって群をなしているのもこのクラゲの特徴である。一束には触手が最多で5本並列して見られる。触手の基部の膨らみに眼点はない。

日本各地北海道から沖縄までの沿岸で普通に見られる。飼育は容易だが、不思議なことになかなか成熟個体が得られない。インド―太平洋、大西洋、地中海、北極海にも世界中広く分布する。

ポリプは外国産のもので分かっており、群性性である。ヒドロ茎は分岐せず、ヒドロ根にクラゲ芽を1個ずつ形成する。田辺湾で親のクラゲを採集できるが、ポリプはいまだ確認されていない。

(京都大学准教授)